第1章　商品

第1節　商品の二つの要因－使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）

〔浜林正夫〕（「『資本論』を読む」学習の友社）

マルクスは、第1巻における資本主義的生産様式の分析として、資本による剰余価値の生産とその蓄積のメカニズムを明らかにするために、まず、①商品の分析からはじめ、つづいて、②貨幣発生のメカニズム（貨幣発生の必然性）を明らかにし、さらに、③貨幣のいろろな機能を説明ている。

資本という範疇に到達することをめざし、商品のもっとも簡単な規定（＝抽象的な規定）から出発している。「抽象的なものから具体的なものへ上向する」方法は、弁証法的な論理展開である。

マルクスは自分が研究するのは、社会一般ではなく、「資本主義的生産様式が支配している社会」と明確にしている。それまでの古典派経済学（アダム・スミス、リカードゥ）は、資本主義を扱いながら、それが人間社会の一般的形態だと考え、過去の諸社会はそこに至る未発展の段階だと思い込んでいた。ましてや、現在を超えるより高度な社会が登場すると思いもよらなかった。

以下、（小見出し）は浜林による。

(富は商品)

p.65 資本主義的生産様式が支配している諸社会の富は、「商品の巨大な集まり」として現れ、個々の商品はその富の要素形態として現れる。したがって、われわれの研究は、商品の分析から始まる。

〔David Harvey〕マルクスは、先験的にいくらか謎めいた有無を言わせ調子で、基本的諸カテゴリーを提示している。商品は、マルクスの先験的な出発点である。

マルクスは、『資本論』の全体を通じて「現れる」の用語を頻繁に用いている。「現れる」は「である」と同じではない。何か他のものが表層の外観の下から現れ出てくるという意味である。

（ryo）先験的：経験の前に取得された知識。「前のものから」を意味する。人がこの概念を使用する場合、すべてがすでに明確であるため、自分のスピーチやテキストを事実で確認する必要ない。アリストテレスを含む古代ギリシャの哲学者によって積極的に使用されていた。反対は後天的である。

〔浜林〕マルクスは「商品の分析」も商品一般ではなく、資本主義社会における商品だとしている。

第1節では「使用価値」と「価値」という商品の二つの要因について科学的な規定を与えることに特別の注意をはらった。この規定が、そのあとの経済学的展開の全体にかかわる意義をもつからである。

「資本主義的生産様式が支配している」：自営業も農民も物をつくっているが、資本家が物をつくるやり方が一般的になっている社会。

「富」：金や銀ではなく、人間の生活に役立つもの。アダム・スミスは「富は労働の年々の生産物である」と定義。自家消費用の物も富に入るとした。マルクスは「富とは商品である」と定義した。これは自家消費用される物は富に入らない。つまり、商品としてお金に替えられるものが資本主義社会では富であるとの考えであり、「…それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる」としている。

「要素形態」：一つひとつがその商品の基であり、富を構成する単位。

（商品とは欲求を満たすもの）

p.65　商品は、なによりもまず、その諸属性によってなんらかの種類の人間的欲求を満たす一つの物、一つの外的対象、である。これらの欲求の性質、すなわち欲求がたとえば胃袋から生じるか、想像から生じるかということは、事態をなんら変えない。ここではまた、どのようにして物が人間的欲求を満たすか―‥。

〔浜林〕「諸属性」：「諸」は気にしない。これは単数、複数を厳密に訳している。

「外的対象」：人間の頭の中ではなく、人間から離れて存在するもの。人間の外にある物質という意味である。

胃袋が欲求する、すなわち肉体的か、想像、すなわち精神的欲求か、どちらでもよい。欲求を生活手段として直接満たすか、生産手段として間接に満たすか、これも問題でない。商品とはまず、人間の「要求を満たすもの」である。

〔David Harvey〕（マルクスはなぜ商品を選んだか）－マルクスが関心をもつのは、❶人々が商品を買うという単純な事実と、❷この行為が人々の生きる仕方に基本的な物だという事実である。商品は誰もが日々接触している。商品に囲まれ、商品を買いものし、眺め、それを欲しがったりして時間をすごしている。商品形態は資本主義的生産様式における普遍的定在である。マルクスは真の公分母を選んだのである。

　マルクスは商品の巨大な多様性を退け、商品一般を語る。「ある一つの物の有用性」として「使用価値」を概念化した。すなわち、商品一般の統一概念である。これは、商品の多様性やその重量や単位の無限の多様性のみならず、人間の欲求、必要、欲望の信じられないほどの多様性を抽象である。使用価値の概念は、今後の展開にいっさいにおいてきわめて重要になる。

1. 《第2節》

　　　　　　　使用価値　　　　　　　　　　具体的労働

　　商品　　　　　　　　　　価値　　　　　　　　　　　　　　　価値形態

　　　　　　　　　　　　　　（社会的必要労働時間）

　　　　　　　交換価値　　　　　　　　　　抽象的労働

　マルクスはまず、商品という　統一概念から始めている。それは、使用価値と交換価値との二重性を体現している。交換価値の背後にあるのは価値という統一概念であり、それは社会的必要労働時間によって規定される。（「社会的必要」というのは、誰かがその使用価値を欲している、あるいは必要としているということをも含んでいる）。

　価値は具体的労働と抽象的労働との二重性を内包している。→第2節へ。

抽象： 他との共通点に着目し、一般的な観念へとまとめ上げること。 （デジタル大辞）

〔浜林〕事物のある側面や性質を抜き出して把握すること。そのさい、他の側面や性質を排除することをいう。

p.66 ‥有用物は、どれも、二重の観点から、質および量の観点から、考察されなければならない。

〔浜林〕「二重の観点」：質および量の観点。紙の場合は、字を書くという性質によって人間の役に立つ。物を包む場合、小さくては役立たない。ある程度の大きさが必要。つまり量である。

「歴史的な行為」：物の使い方は時代によって異なる。使用の仕方の発見は歴史的な行為である。同じ物であっても、時代によって有用性を持つたり、持たなかったりする。個人によっても違う。酒、石油、磁石等々。

「ある物の有用性はその物を使用価値にする。しかし…」：使用価値は、有用性のある商品にくっついている。

「商品体そのものが」：鉄、小麦、ダイヤモンドの商品そのものが使用価値である。

「財」：人間にとって「役に立つ」と同じ意味。

p.66　諸商品の使用価値は、一つの独自な学科である商品学の材料を提供する。使用価値は使用または消費においてのみ、実現される。

〔浜林〕「消費においてのみ」：（使用価値）は使って見なければわからない。

p.67　使用価値は…富の素材的内容をなしている。‥それは同時に交換価値の素材的担い手をなしている。

〔浜林〕「富の素材的内容」：富は商品の意味。売り買いできることに使用価値をあることが含まれている。役に立つことが富の中身である。材料としてその中にあるということ。

〔David Harvey〕「担い手」：何かを担うということは、その何かと同じことではない。

「同時に」ということは、商品にはまだ定義されていない「別の何かの担い手」であるということを語っている。

市場での実際の交換過程は、途方もなく多様である。どうすればわかるか。同じ生産物であっても、時と場所によって大きく変化する。商品は、持ち手を変え、交換システムの中でうごき続けている。

（使用価値の量）

p.68 交換価値は、さしあたり、ある一つの種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち比率として現れる。

〔ryo〕ここで「交換価値」のことばが初出する。ここまで商品は使用価値と価値の統一物であり、商品は使用価値であると同時に価値という二面性があると押さえてきた。この場面で「交換価値」のことばの出現である。ここで脳細胞が「錯乱」する。とりあえず、交換価値は価値が本質であり、交換価値は価値の表現様式あるいは現象形態と押さえて読み進む。

〔的場昭章〕（超訳『資本論』）二つの商品を交換するとき、その価値がそれをもっている人のお互いの妥協で決まるとすれば、交換比率は時と場所による偶然で決まることになる。交換価値に何か決まった量が隠されていると考えるのはおかしい。表面上は偶然に左右されていると見える。果たしてそうか。そこには何か、二つの商品を「つなぐもの」があるはずである。「つなぐもの」が価値であり、それをどう導出するかが問題になる。

p.69　第一に同じ商品の妥当な諸交換価値は、一つの等しいものを表現する。しかし、第二に、交換価値は、一般的にただ、それとは区別されうるある内実の表現方式、「現象形態」でしかありえない。

〔的場〕まず、商品の謎を知る。商品の使用価値とは、その素材がもつ他人の欲望を充足するものであり、コップ、本といった形態である。これを資本主義社会では一般に商品という。欲望の充足が重要なのは当然だが、だれも商品の具体的姿を見てはいない。その背後にある何かを見ている。コップであるのにコップとして映らない。お金を見て、金属や紙だと言う人はいないが、普通の商品ですら、すでにそうなっている。

〔David Harvey〕商品は分解しても、それを交換可能にしている要素をその中に見いだすことはできない。商品を交換可能にしているのは、何か別のものに違いない。それは商品が交換されているその時にしか発見できない。マルクスはここで「運動と過程」という考え方を登場させている。

商品が交換される時、すなわち商品がもち手を変えある時、商品が相互に通約可能であるという質を表現する。通約可能性はどこからくるのだろうか。

「通約（不可能性）」： 科学・哲学の文脈での使用で、体系、概念、方法論などに違いを持つ異なる体系間で、概念間の対応付けがうまく出来ない状態。[**（Wikipedia**](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%80%9A%E7%B4%84%E4%B8%8D%E5%8F%AF%E8%83%BD%E6%80%A7)**）**

（商品の内的な、内在的な交換価値）

p.68‥さらに、二つの商品、例えば小麦と鉄をとってみよう。それらのものの交換比率がどうであろうとも、この比率は、つねに、ある与えられた分量の小麦がどれだけの分量の鉄に等置される一つの等式、たとえば1クォーターの小麦＝aツェントナーの鉄によって表せる。

‥両者は、それ自体としては一方でもなければ他方でもない第三のものに等しい。

〔浜林〕小麦と鉄という使用価値のまったく異なるものを同じモノサシではかる〈共通物〉あるいは〈第三のもの〉がある。両方が交換されるということの中には、①それぞれが役に立つという性質（使用価値）はもちろんあるが、②それが一定の量的な関係で交換されるわけだから、そこにはそれぞれに共通した第三の尺度がもう一つあることになる。 例えば1クォーターの小麦＝ａツェントナーの鉄。両方に同じ、共通のものがあるということになる。両者は、それ自体としては一方でもなければ他方でもない第三のものに等しいということになる。お互いに交換されるということは使用価値が異なるから。その量的な関係を計るときには、両方に共通のものがあって、その共通のものが等しいということ。これが量的に交換されるということ。

p.69 ‥底辺×高さ÷2に還元される。

（労働生産物という属性）

p.70　諸商品の使用価値の捨象である。したがって、一原子の使用価値も含まない。

〔浜林〕共通のものは商品そのものに備わっている性質ではない。性質はさまざまである。洋服は着るため、コメは食べるため。商品と商品が交換されるのは、商品が持っている使用価値を捨てたところで考えることができる。

〈ある本質的なもの〉〈ある共通者〉〈第三のもの〉の探索。

使用価値を捨ててしまうと、お互いに性質が異なるが、交換価値としては、単なる量になる。だから等しいとか、2倍とか3倍だとかという、そういう比率が出来上がってくる。ここには、ひとかけらの使用価値も含んでいない。

（具体的有用労働と抽象的人間的労働）

p.71　そこで、諸商品体の使用価値を度外視すれば、諸商品体にまだ残っているのは、一つの属性、すなわち労働生産物という属性だけである。

〔David　Harvey〕商品体の使用価値を問題にしないのであれば、すべての商品はその生産においてただ労働生産物という属性だけである。先験的な飛躍が行われる。‥これらの労働は。もはや、互いに区別なくなり、すべてことごとく、同等な人間労働、すなわち抽象的人間労働に還元されている。

〔的場〕「属性」：性質のこと。労働によってつくられたという性質のこと。商品から使用価値を度外視すれば、残っているのは、労働生産物という性質だけである。

労働というが、頭脳的あるいは肉体的な労働がある。具体的な物をつくるうえで、それぞれの労働がとっている形が「具体的有用的労働」である。洋服をつくっている、靴をつくっていると言っても、その商品がいろんな用途があるが、用途自体は比べられない。

同様に労働の具体的姿も、交換の尺度にはならない。尺度になるのは、具体的労働ではなく、抽象的人間労働なのである。すなわち、労働力というエネルギーを使った点で共通しているのである。

〔的場〕商品の中に見ることのできない何かに還元することで、商品を見ることができる。叩いても見えない。それをつくった人間の労働しかのこらない。この労働は二つに分かれる。まず、商品をつくった具体的有用労働。それ以外は、しべての商品に共通する非具体的抽象労働、すなわち「抽象的人間労働」である。

p.71　人間的労働力の支出の単なる凝固体以外のなにものでもない。

〔浜林〕「単なる凝固体」：支出されたエネルギーの塊（かたまり）という意味である。これが、商品の価値を構成している。商品体の使用価値を捨象すると、最後に浮かび上がってくるのは、どういう形にせよ、その商品の生産に人間の一定の労働がつぎ込まれてという事実である。

抽象的人間労働：使用価値はすでに捨象されている。労働生産物は上着、小麦などといった特定の形状と性質をもった有用物ではない。それらは、裁縫労働、耕作労働といった特定の具体的形態をとってなされる特定の種類の生産的労働の生産物でもない。

労働生産物の有用性が消え去るとともに、労働生産物を生産する労働の有用性も具体的形態も消え去って、それらはたがいに区別されることのない、すべてことごとく同じ性質の人間労働、すなわち抽象的な人間労働に還元される。

p.71 商品の交換関係または交換価値のうちにみずからを表している共通物とは、商品の価値である。

p.72　したがってある使用価値または財が価値をもつのは、そのうちに抽象的人間労働が対象化または物質化されているからにほかならない。

〔David　Harvey〕「まぼろしのような対象性」であるとすれば、どうすれば見たり測ったりすることができるか。どんなたぐいの唯物論なのか。

　マルクスは、根本的な諸概念を説明し、使用価値から交換価値、そして抽象的人間労働へ、そして最終的に同質的な人間労働の凝固した量としての価値へと議論を進めている。すべての商品を通約可能としているのは、商品の価値であり、この価値は「幻のような対象性」として隠されていると同時に商品交換の過程を通過していく。

　交換価値は、「価値の必然的な表現様式または現象形態」として再解釈できる。　交換価値は、商品の中に表されている人間労働の必然的な表現なのである。

　マルクスはどんな種類の労働が価値の生産に含まれているかに立ち戻る。価値は商品のうちに「対象化なしい物質化」されている‥抽象的人間労働」である。

　マルクスは「社会の総労働力」を見る必要があるというが、詳しくは展開していない。これも先験的な言明である。

「対象化」：自分の外に存在するものになった。

「物質化」：物になった。私のもっている労働力で例えば、缶コーヒーの缶をつくった場合に対象化されたと表現している。

「価値を形成する実体」：価値の実体は、商品に対象化されている抽象的人間労働である。そして商品の交換価値は、価値の表現様式または現象形態にほかならない。

「労働の分量」：商品の価値量は、その商品に対象化されている抽象的人間労働の分量によって決定される。そして労働そのものの量は、労働の時間的継続によって、すなわち労働時間によって度量される。つまり、商品の価値量は、その商品を生産するのに必要な労働時間によって決まる。

〔的場〕交換価値を規定している労働はどう測られるか。その中に含まれている労働の量によって決まる。具体的には労働が支出された労働時間－労働日によって決まる。

〔David　Harvey〕リカードは、価値としての労働時間という概念を訴えた。マルクスは社会的必要労働時間という概念を用いる。マルクスは、リカード的概念装置を模倣し、一見無邪気に、一つの修正を挿入した。この挿入が世界を変えた。何が社会的に必要なのか。それはどのように誰によって規定されるのか。

　もし、われわれの社会の基本的な価値構造が誰によってどのように決定されているかという問題にげんじつにむきあうことなしに、地球温暖化のような問題を解決できない。

（社会的平均労働力）

p.72　社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と労働の熟練および強度の社会的平均度をもって、なんらかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である。たとえば、イギリスで蒸気機械が導入されてからは、一定の分量の糸を織物に転化するためには、おそらくは依然の半分の労働で足りたであろう。

〔浜林〕「商品の価値はどう計る」：価値をつくる実体である労働の分量による。そして労働の量は時間によって計られる。

　「現存の社会的・標準的な生産条件」：どのような機械等を使うのか。

p.73　ある使用価値の大きさを規定するのは、社会的に必要な労働の分量、または、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間にほかならない。

〔浜林〕「ある使用価値の大きさを規定するのは、社会的に必要な労働の分量または、価値の生産に社会的に必要な労働時間にほかならない」は、ここまでをまとめている。生産に社会的に必要な労働時間が同じ商品は、同じ比率で交換されると言っている。

〔David　Harvey〕社会的必要性とは、『資本論』全体を貫く一つの主題である、資本主義的生産様式の中に埋め込まれた社会的な必要性とは何であろうか。商品価値は固定的な大きさではない。生産性の変化に敏感に反応する。マルクスは、技術と科学が資本主義にとって持つ意義を大いに重視している。

p.73 イギリスにおける蒸気機関の導入後－一定量の糸を織物に転化させるためには、以前の半分の労働で足りる。手織工は実際には、相変わらず同じ労働時間を必要とした。彼の個別的労働時間の生産物は、いまでは、半分の社会的労働時間を表わすにすぎなくなり、したがって以前の価値の半分低落したである。

（労働力の発展と価値）

p.74 1823年の時点で、ブラジルのダイヤモンド鉱山の過去80年間の総産出高は、ブラジルの砂糖農園またはコーヒー農園の1年半分の平均生産物価格にも達していなかった。

‥一商品の価値の大きさは、その商品に実現される労働の分量に正比例し、その労働の生産力に反比例して、変動する。

〔浜林〕生産力が変わらなければ価値は変わらない。

価値法則　は価値の実体と価値量は商品生産者の意志から独立している客観的法則である。それは「労働者の熟練の平均度」「科学とその技術的応用可能性との発展段階」「

生産過程の社会的結合（分業）」「生産手段の規模とその作用能力」自然現象（トンネル工事では地山の状態ryo）」に規定される。

（役に立つけれどもタダのもの）

p.76　ある物は、価値であることなしに、使用価値でありうる。

‥たとえば、空気、未開拓地、自然の草原、原生林などがそうである。

‥中世の農民は、封建領主のために年貢の‥。

〔浜林〕「価値であることなしに」：タダということ。売買されないということ。使用価値がある。つまり役立つが、売買の対象にならない。労働に媒介されず、つまり労働を費やさなくてもそのまま自然のままで人間の役に立つ物のこと。

・コメの自家用米は使用価値をつくり　出すが、商品をつくり出さない。

・使用価値でないのに価値であることはできない。錆びたナイフのように、物が無用であれば、そこに労働も無用となり、その物は価値でありえない。商品になるためには、生産物は、それが使用価値として役立つ他人の手に、交換を通して移されなければならない。

使用価値と価値―3つの指摘

❶価値ないが、使用価値である。労働生産物でない有用物。空気、野生の立ち木。

❷商品は　他人のための使用価値の生産であり、交換により、他人に移転するもの。

❸使用価　値のないものは価値がない。錆びたナイフ。含まれている労働も無用となる。

「年貢」：年貢は商品ではない。タダで取り上げられる。自給自足のもの、タダでとりあげられるもの、略奪されるものは商品ではない。

〔David Harvey〕マルクスの議論の構造を振りかえる

使用価値

（物質的な質と量。異質的）

交換価値　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　価値

（量的、同質的）　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（非物質的で関係的、

社会的必要労働時間

まず、商品の統一概念から開始し、その二重の性格を確認した。商品は使用価値と交換価値をもっている。

交換価値は「何か」を表現している。マルクスは価値を表現するものだという。価値とは社会的必要労働時間である。しかし価値は使用価値とつながらなければ無意味である。使用価値は価値にとっては社会的に必要である。

　商品をとりまく使用価値、交換価値、価値という3組の概念を通じて、総体性をもっともよく接近できる。マルクスは、使用価値は途方もなく多様であり、交換価値は偶然的、相対的であり、価値は「幻のような対象性」を有しており、少なくとも技術的変化と社会的・自然的諸関係の激変を通じた絶え間ない革命にさらされていることを認識していた。

商品

マルクスの弁証法的叙述方法

厳密な意味でのヘーゲル的論理ではない。存在するのは一時的な統一の契機だけであり、その内部には別の矛盾＝二重性が内包されており、それを理解するためにさらに議論を展開しなければならない。『資本論』の叙述過程のあり方である。実際、それは展開であって、論理的導出ではない。生み出すのは論証の骨格構造であり。資本主義を絶え間ない矛盾的統一とそれゆえ、絶え間ない運動の中に維持する内的諸関係の理解がますます広がるのである。

使用価値　　　　　　　　交換価値

（異質性）　　　　　　　（同質性）

価値（社会的必要労働）

具体的労働　　　　　　　抽象的労働

交換

相対的価値形態　　　　　等価形態

貨幣商品

〔ryo－第1節および使用価値のまとめ〕

使用価値＝人間にとっての有用物。

価値＝人間労働の凝固物である。

この使用価値と価値が、商品の交換価値を生み出している。価値の大きさは、凝固した労働時間で計られる。価値と交換価値は、価値が本質、交換価値は現象形態の関係にある。

交換価値は、目に見えない価値の必然的な現象形態として、表に現れている価値の姿を指している。交換価値は、商品を売る。つまり、ある商品が他の商品と交換されるさいの量的関係である。時と場所でたえず変動している。現象面では、交換価値は、需給関係で偶然的に決定されるように見える。しかし、本質的な内容は、抽象的人間労働の結晶物としての価値である。（「マルクス主義経済学講座」新日本出版社）

使用価値の概念から

❶人間的欲求を満たす物　→　欲求の性質は問われない。

❷商品体そのものである　→　有用性はその商品にくっついている。

❸自然科学の物とは違う　→　有用性と使い方を発見した時、使用価値になる。

❹量的規定性がある　→　得るための労働の多少には関係ない。

❺量をはかる社会的尺度　→　歴史的発展の中で考え出したもの、

❻使用価値の形態　→　自然の形態である。

❼消費においてのみ実現される　→　使ってみなければわからない。

❽富の素材的内容をなしている　→

❾交換価値の素材的担い手　→